短歌

木村光子
小西久二郎
宮本照男
選

特選

「お互いに歳とったな」とこぼしつつ
おけらのように雪を掻きいる

堀町　河分武士

（評）今年は格別に雪が多かった。雪掻きの回数も多くそのたび老人の出役となる。それはばかか、あほうに似ている。そのあきらめが四句に出ているといえよう。

特選

鉢巻きの一人耕す涅槃西風
猿の見ている峡の畑にて

大藪町　是沢　卓

（評）現代農業から置き去りにされた過疎の畑を耕す詩である。自らを客観視する背と「涅槃西風」の非日常用語を背景に、父祖伝来の地を守る心が一首の柱。俗に陥らない精神がこの歌を引き締めている。

特選

角丸くなりたる竹の物差しに
薄く残りし子の名ひら仮名

長浜市　樋口満智子

（評）小学生の頃に勉強で使用した「竹の物差し」を手にとって懐かしく且つ想いを深くして状況が柔らかな表現で表白されている。下句の「子の名ひら仮名」の言葉の調べも適切で結句に余韻を感じる一首となりました。

入選

覇気の無き帰省の孫に生気差す
わが大駒は搦め捕られて

本庄町　田口敏子

（評）帰省の孫の覇気の無さを見抜いた印象から一転、一局のすむうちに、「わが大駒」の無惨に穏やかならぬ作者。苦汁とも感嘆とも、結論は読者に委ねられているようであるが。

入選

芹川に架かる芹橋渡るたび
稚鮎如何にと覗く早春

芹橋二丁目　古池陽彦

（評）芹川に架かっている芹橋を渡るたびに、稚鮎はいるのか、大きくなったかとのぞいている。稚鮎は氷魚とも鮎苗とも言われるが、今年は不漁のようでさみしい。作者の思いが伝わる。

入選

夜なべにて亡父の綯いし細縄の
綜麻なつかしく納屋に吊さる

犬上郡甲良町　村岸千鶴子

（評）農作業に使用している道具を仕舞っている納屋であろうか？普段、何気なく目にしている細縄に亡き父の面影を感じている。納屋の独特な匂いと少しひんやりとした空気感が「綜麻」や「綯う」の言葉に情を感じる。

入選

いやさかの彦根城なり三十路なる
孫らやがてはこの地に戻らん

長浜市　木村諄子

（評）いよいよ栄える彦根城であることよ。三十路になった孫たちも、やがてはこの地に戻ってくるだろう。孫の帰郷を待つ作者の心境が、結句に出て余情となっている。

入選

老いてなお厚手の衣服脱ぎおきて
ヘルスメーターにそっとのる春

佐和町　大橋　くに江

（評）「老いてなお」…美しさ？体型？健康？その志や良し！ですね。揺れるお気持ちは下句の中に充分現れておりますね。結句の祈りにも似た心地良い表現に思わず頷いてしまう佳き歌となりました。

入選

黄帽子の園児ら乗り来てバスのなか
菜の花畑となりて揺れおり

東近江市　田附孝子

（評）バスに乗り込んで来た「黄帽子の園児」に車内は一転。帽子の黄も明るく、弾ける声も「菜の花畑となりて」と直感に托した効果であろう。国の未来を担う園児らへ目を細くしている作者が見える。

佳作

帰りゆくまぎはの息子が佛壇に
ながく拝むを玄関にまつ

西今町　久永朝子

佳作

前を行く妻の手提げの底を擦る
細き雪道行き交ひ難し

小泉町　磯　史郎

佳作

雪の朝転ばぬように念じつつ
ゴミ当番の籠出しに行く

鳥居本町　寺村美恵

佳作

家を守る老いし独り身洗面の
鏡に向きて今日の仕事決む

栄町二丁目　長谷川　紀子

佳作

花の城のお誘い受けてうちの娘は
祖母の大島紬で急ぐ

長浜市　勝木岩松

佳作

芋づるを燃やす煙の細るさえ
気づかぬ農婦スマホあやつる

長浜市　山田静子

佳作

逆光の梢の先きの寒鴉
大夕焼けの朱を背(せな)にして

池州町　戸田雅子

佳作

取り戻す湖の輝き葦植えて
びわ中学の親子活動

地蔵町　佐古徳子

佳作

太りたる鯉盗られしと立ちし札
「魚とるな」ハングル、英語、日本語

犬上郡多賀町　木村正子

佳作

大雪に耐えし玉ねぎのご褒美に
追肥をやる晴れ渡る空

米原市　日比陽子

佳作

年の瀬に夫から継ぎし寄せ植ゑの
梅満開と子にメールする

犬上郡甲良町　上田八重子

佳作

待ちかねし弥生となりてコルセット
三月(みつき)満たして今日はずせたり

下西川町　北川和子

佳作

昼下がり窓から伊吹山も見え
村上春樹読む幸せか

東沼波町　石井浪栄

佳作

春だよと並ぶポンカンデコポンの
ポンと言う度何かが弾む

日夏町　寺村享子

佳作

様ざまの容器となりし紙の箱
解(ほど)きゆかんかパズルのように

松原町　北川満代

佳作

白砂を静かにおほふ気比の浜
　掬ふ両手に春は届きぬ

西今町　松本　トシ子

佳作

早世の母の知らざる齢経て
　未知なる老いを我授かりぬ

古沢町　大橋　しず

佳作

青空に天守を飾る十八の
　破風かがやきて四百十年祭

高宮町　細田　惠貢子

佳作

あと十年「生きられるやろ」農衣の夫
　小屋屋根見つめ張りかえ決めり

犬上郡豊郷町　伊香　とし子

佳作

迷信と高を括らん友引も
　今日は正夢良きことニつ

米原市　大久保　無畏子

佳作

儚(はかな)げに頭垂(こうべ)れをり猩々袴(しょうじょうばかま)
　淡きピンクは希望のしるし

日夏町　成宮　恵津子

佳作

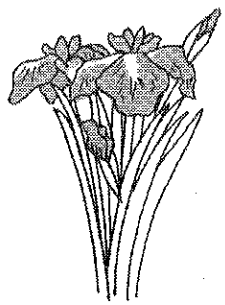
脊鴒は尾を振るひつつ雪解けの
　水を飲みたりのみどをあげて

甘呂町　小野　和子

佳作

補聴器をはずして当てる糸電話
　優しい声だけ聞きたい時に

稲里町　野瀬　善一



《総　評》

一七九首の感性に向き合いつつ、言い難い重さを感じる選歌でした。定型の制約、発見や感動の窮りを表現するわけですから、多く述べよう、語ろうと気負う余り、本来の核心が曖昧になった何首かを惜しんだことです。「一首の核心」は、「作者自身」であり、「表現の用語」。いかに印象的に読者に迫るかという点です。

一方、短歌を詠む人に課せられている課題の一つに「言葉の修練」があります。マスメディアの洪水のような時代を生きる私達には、実に豊かな伝達手段が溢れています。好むと好まざるに関わらず、豊かな文明の世に一歩を記している私達です。この時代を生き、短歌と言う自由の翼を手にしています。短歌を詠む自由を存分に謳歌しましょう。

木村光子

応募者のいささか減っているのはさみしいが、短誌型全般の現象でほどこすすべもない。わが師米田雄郎は私が入社したとき、ハガキに大きな字で次のように書いておられた。「迷わず、あせらず、歌ながく作れ」。以来六十余年経つがこの言葉を忘れたことはない。今でもその教えは私の心の中に生きている。今一つ忘れがたい言葉は、一般的に歌は作るものとされているが、雄郎は「歌は生まれるものである」と。作ろうとするとどうしても無理が生じる。作為が目立つし、読者意識がはたらき、作品をだめにする。応募作品の大半はこのなかに入る。雄郎の歌はどれも素直で、素朴であって、首をひねるような歌はない。何の抵抗もなく心に伝わってくる作品、元来歌とはそういうものであろうが、新しさをもとめ、個性を強調するあまりに、歌の本質からはずれているように思える。もう一度歌の原点を見直す必要があろう。今年の選歌にあたり、感じたことをのべておきたい。

小西久二郎

今回も多くの作品に出会う事が出来ました。日々の出来事を丁寧に見つめた歌、身の回りの小さな事からお住まいの街の風景や出来事は勿論、大きな社会に目を向けた歌など実に多くのテーマが選ばれ歌われていました。短歌を詠むことは作者の人生に出会うことで在ることを改めて感じました。この慌ただしい時代に日本人らしい深みを讃えた歌や心の起伏を感じさせる印象的な歌も数多く在りました。

現代社会では老若男女を問わず誰もが簡易さや即効性を求めがちです。身近な情報ツールで成功体験を鵜呑みにして出来るだけ簡単に結果を得ようとする風潮が目につきますが、短歌には字句をさまざまに工夫する「推敲」という考えを練る作業が在ります。試行錯誤、苦労を重ねることも多いと思いますがそれも作歌の楽しみとして捉えて頂き共に頑張って行きたいものです。

宮本照男

選者詠

轍二本ばかりが命の証なる
青き夜明けの感傷として

木村光子

またひとり友失ひぬ野も山も
青葉の萌ゆる季節といふに

小西久二郎

ともすれば解ある道を歩み来し
百八つの鐘を見送る

宮本照男